

報 告 文

主任研究者 坂 元 正 一

基礎科学の進歩と共に医療技術は急速に発達し、それに伴って脳死・体よりの臓器移植や体外受精・胚移植などに関連した新技術の応用は、生命倫理学上の重要な争点にさえなっている。科学の発達とは別に、女性の高学歴化・就業率の増加は、必然的に晩婚化・少産少死・1.53shock現象を招き、産む性としての女性自身の管理さらには社会経済的な配慮そのものが重要問題化してきた。さらにAIDSの急激な増加と10代妊娠の増加は、思春期前から成人までの系統的性教育ならびにAIDSを含むSTDへの緊急対策を迫るものと言えよう。私達は「女のからだ」をめぐるいろいろな問題を前にして、母性保護の観点からだけでなく、世界一の長寿を達成した日本女性のLife cycleの全てのstageでの健康増進をめざして本研究をstartした。しかも、四つの分担研究の各々を女性を中心にして主体的に進めることとした。

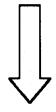
第一は、竹永和子(マザーリング研究所所長)氏他9名による「女性の保健に関する研究」である。Health promotionの観点から、日本女性の抱える問題を医学的、社会科学的観点から検討した結果、働き盛り、女盛りの熟年女性の保健問題(更年期障害、尿失禁、性交障害、骨粗鬆症など)が、当面の最重要課題として抽出できた。平成4年度は、福岡市在住の25人のオピニオンリーダーと共にミニフォーラムを実施して、専門性の高い提言をまとめる。

第二は、前原澄子(千葉大学看護学部教授)氏他11名による「働く女性の母性保健に関する研究」である。アンケート調査方式で、奈良県で「母性保健に関する意識調査(1,778人回答)」、静岡県で「育児と就労に関する意識調査(483人回答)」、および「働く女性のSocial support(54人回答)」を実施した。その結果、中高年男性の母性保護意識は低いが、女性達も「わからない」と回答するなど意識の低さが目立ったこと、育児と就労の両立には、社会的supportの他、夫の意識改革が重要であること、働く妊婦の保護は近親者による非組織的支援に委ねられているという実態が明らかになった。今年度は、企業、社会の組織的支援をどのように構築すべきか検討する。

第三は、中村桂子(早稲田大学人間科学部教授)氏他7名による「Reproductionに関する研究」である。親と子の「つながり」というような世代を越えてつなげていこうとする意識が、女性達に希薄になっていることを文化人類学的に検討し、安定的に継続する社会を成立させる基本には「つながり」に関する信念を共有した人と人とのNet work構築が不可欠であると考察した。その信念に関わる基本要素として人のはじまりをどこにおくか、周産期の生育限界、高齢妊婦の胎内診断と中絶をどう考えるかについても、生命倫理学の観点から検討する。

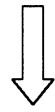
第四は、堀口雅子(虎の門病院産婦人科)氏他10名による「思春期における性行動の研究」である。初めに、思春期における性行動に関する文献を443編集め、思春期の性生理、性意識、性行動、避妊、妊娠、人工妊娠中絶、出産とその結果、性教育および関連法規別に整理し探索した。そして、若年妊娠とSTD予防のためには、系統的な性教育が必須であるという立場から、性教育を担当する小学校教諭を対象として予備調査した。その結果、性教育の必要性を感じながらも戸惑い、不安、期待を持つ教師達の姿が浮かび上がった。今年度は、高校生の性教育の実情をアンケート調査し、また、中絶の時期を失して分娩することになった10代妊娠の実情を長野県でField workする予定である。

以上、四つの研究を通じて、日本女性のLife style、Life cycleに応じた健康度を評価し、quality of Lifeの改善に向けて適切な提言ができるよう今年度も研究を継続する。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



基礎科学の進歩と共に医療技術は急速に発達し、それに伴って脳死・体よりの臓器移植や体外受精・胚移植などに関連した新技術の応用は、生命倫理学上の重要な争点にさえなっている。科学の発達とは別に、女性の高学歴化・就業率の増加は、必然的に晩婚化・少産少死・1.53shock 現象を招き、産む性としての女性自身の管理さらには社会経済的な配慮そのものが重要問題化してきた。さらに AIDS の急激な増加と 10 代妊娠の増加は、思春期前から成人までの系統的性教育ならびに AIDS を含む STD への緊急対策を迫るものと言えよう。私達は「女のからだ」をめぐるいろいろな問題を前にして、母性保護の観点からだけでなく、世界一の長寿を達成した日本女性の Life cycle の全ての stage での健康増進をめざして本研究を start した。しかも、四つの分担研究の各々を女性を中心にして主体的に進めることとした。

第一は、竹永和子(マザーリング研究所所長)氏他 9 名による「女性の保健に関する研究」である。Health promotion の観点から、日本女性の抱える問題を医学的、社会科学的観点から検討した結果、働き盛り、女盛りの熟年女性の保健問題(更年期障害、尿失禁、性交障害、骨粗鬆症など)が、当面の最重要課題として抽出できた。平成 4 年度は、福岡市在住の 25 人のオピニオンリーダーと共にミニフォーラムを実施して、専門性の高い提言をまとめる。

第二は、前原澄子(千葉大学看護学部教授)氏他 11 名による「働く女性の母性保健に関する研究」である。アンケート調査方式で、奈良県で「母性保健に関する意識調査(1,778 人回答)」、静岡県で「育児と就労に関する意識調査(483 人回答)」、および「働く女性の Social support(54 人回答)」を実施した。その結果、中高年女性の母性保護意識は低い、女性達も「わからない」と回答するなど意識の低さが目立ったこと、育児と就労の両立には、社会的 support の他、夫の意識改革が重要であること、働く欄の保護は近親者による非組織的支援に委ねられているという実態が明らかになった。今年度は、企業、社会の組織的支援をどのように構築すべきか検討する。

第三は、中村桂子(早稲田大学人間科学部教授)氏他 7 名による「Reproduction に関する研究」である。親と子の「つながり」というような世代を越えてつなげていこうとする意識が、女性達に希薄になっていることを文化人類学的に検討し、安定的に継続する社会を成立させる基本には「つながり」に関する信念を共有した人と人との Net work 構築が不可欠であると考察した。その信念に関わる基本要素として人のはじまりをどこにおくか周産期の生育限界、高齢妊婦の胎内診断と中絶をどう考えるかについても、生命倫理学の観点から検討する。

第四は、堀口雅子(虎の門病院産婦人科)氏他 10 名による「思春期における性行動の研究」

である。初めに、思春期における性行動に関する文献を 443 編集め、思春期の性生理、性意識、性行動、避妊、妊娠、人工妊娠中絶、出産とその結果、性教育および関連法規別に整理し探索した。そして、若年妊娠と STD 予防のためには、系統的な性教育が必須であるという立場から、性教育を担当する小学校教諭を対象として予備調査した。その結果、性教育の必要性を感じながらも戸惑い、不安、期待を持つ教師達の姿が浮かび上がった。今年度は、高校生の性教育の実情をアンケート調査し、また、中絶の時期を失って分娩することになった 10 代妊娠の実情を長野県で Field work する予定である。

以上、四つの研究を通じて、日本女性の Life style、Life cycle に応じた健康度を評価し、quality of Life の改善に向けて適切な提言ができるよう今年度も研究を継続する。